

人とのつながり

2001年4月、市制30周年市民実行委員会の嵐のような怒涛の事業が終わり、本当によく流した汗から生まれた人間関係をこのまま終わらせても良いものか、という「人好き」が高じて、『おにたま協議会』が生まれました。昨年は、2000年に色々と写し取った隠れた名所を網羅した『のぼりべつ自然景観マップ』を基に、驚別、幌別、登別の3地区で『おにたま散策会』と、21世紀の「人間」を知るため、北大の全面支援を受けて、『おにたま講座』を開講。「何が人間らしい生き方なのか、これからの育児はどうあるべきか、社会問題となっている傷つく青年期のひきこもりの問題、成長する人間は、どのような脳の働きに支えられて物事を認識するものなのか」ときは、専門的ともいえる講座を5回開催し、みんなで「学生」しました。楽しい合コンもありましたよ。

21世紀も「おにたまは人が好き」、しかし、それだけでは、人とのつながりを豊かにすることはできません。2000年のような、疲れ切ってもなお休まずにイベントを実行した青年期からみれば、昨年の活動は、どちらかと言えば、地域の再発見、人の再発見という学習、このころの中に結びつけていくのか」しっかりと認識をつけ、未来に結びつけていく大人になるための「学生」の時期でした。

湿原の魅力伝えたい

2002年、おにたま協議会は「新しい出会いと別れの場所、そして、ダイナミックな細胞分裂で増殖する出入り自由なゆるやか協議体、明日こそ何かある日」を目指していききたい、と思っています。

(登別温泉町／白田明義さん)

私が所属する『ふるさと自然情報局』は、若山町に残るキウシト湿原の保護に取り組んできました。

都会の中に湿原があることは、とても珍しく貴重な財産と言えます。平成9年から動植物調査を続けてきました。鳥や昆虫などたくさん生物が生息していることや、大変珍しい形態の湿原だということが明らかにになりました。この湿原を何とか残せないものかと行政と相談を重ねた結果、市民の憩いの場や子どもたちの自然学習の場として、残せるよう努力していくことになりました。

実現できたら、市民が仕事や家事の合間の息抜きに気軽に立ち寄れるでしょう。学校では生活の時間、ふるさと学習などの総合的な学習に大いに利用できるでしょう。写真や絵画、ネイチャーゲーム、クラブ活動などさまざまな活用の可能性を持っています。私たちも市民会議『キウシト湿原を考える会』とともに観察会や外来植物の駆除などを行い、湿原の魅力に触れました。市民には、まだまだなじみの薄い湿原ですが、道内外には興味を持つ人も

多く、都会の中でどのように残していくのか注目しています。去年は環境省から重要湿原に指定され、ますます注目を浴びることになりました。

この貴重な財産は必ずしも市民に認知されているとは言えません。今年は『キウシト湿原を考える会』とともに写真展や観察会などを開き、多くの市民に湿原の魅力に触れていただくことを考えています。

(登別東町／48歳 堀本宏さん)



▲若山町のキウシト湿原

地域を支える町内会活動

若葉町内会は、昭和58年に創立、地域の実情に合わせた各部署ごとの活動を行っておりますが、特に福祉部が担当している『ふれあい・いきいき・サロン』は、少子・高齢化が進む中で、一人暮らしであったり、家族がいても昼間一人で会話をする相手もなく、閉じこもりがちに暮らしている高齢者の方などが、気軽に外へ出て仲間づくりを



▲若葉町内会の花壇

したり、一緒に食事をするなどにより、地域でいきいきと元気に暮らせるように毎月開催し、高齢者の方から大変喜ばれております。

また、明るいまちづくりの一環として、花いっぱい運動を地域ぐるみで行い組んできたことが評価され、北海道主催の平成13年度北のまちづくり賞の『花新聞・ほっかいどう賞』を受賞しました。

登別特有の厳しい気象条件の中で、毎年知恵を凝らして地域ぐるみで取り組んだ花壇づくりや土づくり、苗の植栽など、美化班の手塩にかけて育てた努力が実り、今回初の応募で全道での賞を獲得できたのも、町内会のみならずの応援と一生懸命に取り組んでいただいた結果と喜んでおります。

私も、この地域の一住民として、地域のみなさんと共に町内会活動にお手伝いできればと思っています。

2002年も、良いアイデアを出し合い、汗を流して、明るい住みよいまちづくりに取り組んでいきます。

(富岸町／72歳 松山惇さん)